

〈ICOM 京都大会開催記念〉

集めた！日本の前衛ー山村徳太郎の眼 山村コレクション展

The Yamamura Collection: Gutai and the Japanese Avant-Garde 1950s-1980s



**前衛美術の一大コレクション、約 20 年ぶりの大公開！
展示スペースを拡大しての特別企画。**

「山村コレクション」とは、兵庫県西宮市に在住していた企業家、山村徳太郎（1926－1986）が収集した戦後日本の前衛美術の作品群です。山村の没後、兵庫県立近代美術館（当時）へ 68 作家 167 点が一括収蔵され、現在も当館現代美術コレクションの核となっています。将来的に公共の財産となることを念頭に集められた作品群は、個人の収集品とは思えぬ大きさと質を備えており、個々の作品は当館ほか国内外で度々展示される一方で、まとめて紹介される機会は限られてきました。

このたびの展覧会では、企画展示室に加え別棟のギャラリーも会場に、約 20 年ぶり、かつ過去最大規模の出品点数により、「山村コレクション」の全体像を紹介します。

本展のみどころ

抽象のパイオニアから、世界の「具体」、 80年代のニュー・ウェイブまで。 今こそ新鮮な前衛美術の数々。

山村は、まだ評価の定まらない新しい表現を、自分の眼で確かめ、いち早く集めました。戦前より抽象に取り組んできた世代から、国際的に名高い前衛美術集団「具体美術協会」、さらには80年代に登場した若手作家まで、結果的に「山村コレクション」には、今や戦後美術史を語る上で欠かせない数々の重要作が含まれています。

収集方針は、山村自身の言葉によれば「アブストラクト（＝抽象）と人間くさい前衛のはざ間」。たしかに前衛美術といってもクールに尖っているだけではなく、どこか作り手の体温や、ユーモアを感じさせる作品も多く見られます。これら昭和後半の同時代美術は、21世紀の私たちには驚くほどストレートなパワーにあふれ、今こそ新鮮に映ります。

社長は一步先をゆく。 再制作、オーラルヒストリー…今、最も旬なトピックも。

製塩会社社長としての山村徳太郎は、いち早くリサイクルに取り組んだことで知られています。時代の一步先を行く山村は、晩年、先取的な作品の購入に加え、失われた実験的作品の再制作という野心的なプロジェクトにも乗り出しました。本展でもコーナーを設け紹介するように、再制作にあたってはインタビューや写真資料などの丹念な調査が行われています。これらは、昨今盛んなオーラルヒストリー（口述歴史）やアーカイブズ資料を活用した調査研究活動の先駆的な事例と言えるでしょう。

参考：これまでに開催された「山村コレクション」展

- ・「幻」の山村コレクション展
1989/3/4～3/23、兵庫県立近代美術館（109点）
- ・「戦後美術の断面—兵庫県立近代美術館所蔵・山村コレクションから」
1996/11/23～12/27、千葉市美術館（70点）
- ・「あるコレクターが見た＜現代＞美術—山村コレクション展」
1997/2/1～3/24、兵庫県立近代美術館（98点）

なお山村の生前、1985年4月20日に、当時、大阪・万博公園内にあった国立国際美術館を借り切って、その時点での収集品全てを並べ作家や評論家などの関係者に公開する、一日限りの「山村コレクション研究会」が開催されています。



1) 村上三郎《作品〈空〉》1956年/1985年再制作
1956（昭和31）年の「具体野外美術展」で発表した作品を、1985（昭和60）年、山村の依頼で再制作したもの。本リリースに掲載の山村のポートレートは、この作品の再制作に立ち会っている際の写真です。

「出会いこそ人生」—

知られざる山村徳太郎の収集物語を大胆に再構成

本展では、山村がどのように作品を集めコレクションを形成していったのか、これまで注目されてこなかった収集の経緯を、関係者への聞き取りや文献資料などから読み解き想像し、いわば山村徳太郎の「こうだったんじゃないか」収集物語として展示を構成します。

山村の著書『一本のあきびんから』には「出会いこそ人生」という印象的なフレーズがあります。山村は作品収集においても、作家本人と会うことを重視していたといえます。山村徳太郎という一人の人間が、それぞれにユニークな人間のつくる作品とどのように出会い魅了されたのか一会場で繰り広げられる収集物語を通じ、来場者もまた幾多の個性と出会い、その魅力を肌で感じていただく機会となるでしょう。

[展覧会構成]

- I 社長業の傍らで—さまざまな出会い 1950～1970年代
西宮で／東京で／パリで／「元永街道」
[資料展示] もうひとつの山村コレクション
- II 転機 1970年代末～1980年代初頭
新時代の予感—絵画と立体／欧州での「具体」再発見
- III 更新は続く—中断の間際まで 1983～1985年
80年代のニュー・ウェイブ／充実する「具体」／再制作プロジェクト／
アブストラクトと人間くさい前衛のはざ間／突然の中断
[資料展示] 一日限りの「山村コレクション研究会」

※コーナー名等は、都合により変更する可能性があります。

山村徳太郎 (1926-1986)

1926(大正15)年9月、兵庫県西宮市に生まれる。戦後もない1948(昭和23)年、若くして山村製壺所所長に。1955(昭和30)年、組織改編により山村硝子株式会社取締役社長となる。この頃より、母ハルとともに美術作品の収集を開始。当初は国内外のモダンアートを集めていたが、母の死を機に、1966(昭和41)年、収集品のうちジョアン・ミロら海外作家の大作7点を国立西洋美術館に寄贈、以後、日本の戦後美術を対象を特化する。1983(昭和58)年、社長を退き顧問に就任。1986(昭和61)年1月、59歳で逝去。



2) 村上三郎《作品〈空〉》の再制作を見守る山村徳太郎
1984年、アートスペース(西宮)にて 撮影:小野和則

開催情報

ICOM 京都大会開催記念

集めた！日本の前衛－山村徳太郎の眼

山村コレクション展

会期 2019年8月3日(土)―9月29日(日)
休館日 毎週月曜日
ただし祝日・振替休日の8月12日、9月16日、
9月23日は開館し、翌火曜日の8月13日、
9月17日、9月24日休館
開館時間 10時―18時
(ただし毎週金・土曜日は20時まで)
入場は閉館の30分前まで
会場 兵庫県立美術館 企画展示室、ギャラリー
主催 兵庫県立美術館、神戸新聞社
後援 株式会社サンテレビジョン、株式会社ラジオ関西
協賛 TKG Foundation for Arts & Culture、
公益財団法人 伊藤文化財団
助成 一般財団法人 安藤忠雄文化財団

[観覧料]

区分	当日	団体(20名以上) / 前売(8月2日まで販売)
一般	1,300円	1,100円
大学生	900円	700円
高校生以下	無料	無料

[その他割引適用料金]

区分	当日	団体(20名以上)
70歳以上 ¹⁾	650円	550円
障がい者 一般	300円	250円
^{1) 2)} 大学生	200円	150円

1) 証明できるものの提示が必要です。

2) 障がいのある方1名につき、介護の方1名は無料。

※コレクション展の観覧には別途観覧料金が必要です。

(本展とあわせて観覧される場合には割引あり)

※主なチケット販売場所：兵庫県立美術館ミュージアムショップ(前売のみ)
・阪神(当日一般のみ)・近鉄主要駅・JTBレジャーチケット(セブン
イレブン、ローソン、ファミリーマート、サークルK・サンクス、ミニス
トップ/前売：0251427、当日：0251428)

出品点数(予定) 約140点(全て山村コレクション)

関連事業

- 記念講演会
「山村コレクションは美術館に何を問いかけるか」
尾崎信一郎氏(鳥取県立博物館副館長)
9月1日(日)14時より(約90分)
ミュージアムホール(定員250名)にて 聴講無料
- 担当学芸員によるテーマ・レクチャー
① 聞き取りと紙資料から描く
「山村コレクション」収集物語
江上ゆか(当館学芸員)
8月24日(土)16:00～(約60分)
② 山村徳太郎の具体コレクション
鈴木慈子(当館学芸員)
9月14日(土)16:00～(約60分)
いずれもレクチャールーム(定員100名)にて
聴講無料
- 担当学芸員によるギャラリー・ツアー
8月17日(土)・9月21日(土)18:00～(約45分)
展示会場入り口に集合 要観覧券
- こどものイベント
8月10日(土)
詳細は当館HPにて7月上旬にお知らせします。
対象：小学生以上、高校生以下
※小学2年生以下は保護者同伴必要
※7月10日(水)より電話受付開始予定
- ミュージアム・ボランティアによる見どころ案内
毎週日曜日11:00～(約15分)
レクチャールーム(定員100名)にて 聴講無料

同時開催の展覧会

・コレクション展II

〈特集1〉けんび八景―新収蔵作品紹介―

〈特集2〉没後80年 村上華岳

〈小企画〉美術の中のかたち―一手で見る造形

八田豊展 流れに触れる

・横尾忠則現代美術館での展覧会

8月25日(日)まで：人食いザメと金髪美女―笑う横尾忠則展

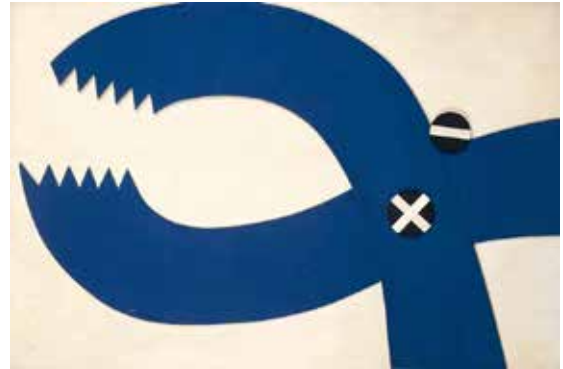
9月14日(土)より：横尾忠則 自我自損展

出品作品介绍



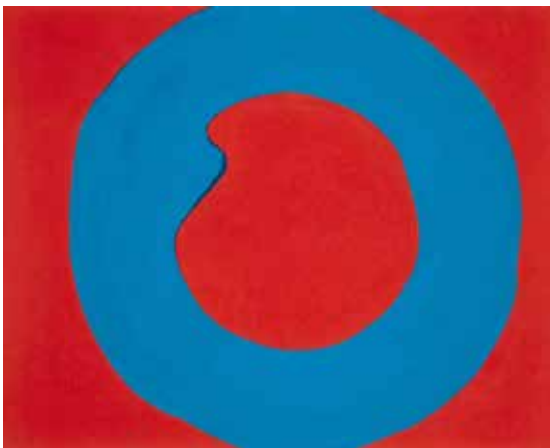
3) 津高和一《母子像》1951年(第I章に展示予定)

山村徳太郎による戦後美術コレクションの第一号。詩人でもあった画家の津高が、独自の詩的な抽象表現へと一歩踏み出した、画期を示す作品です。津高は山村コレクションに14点と最多の作品が含まれます。



5) 斎藤義重《ペンチ》1967年(第I章に展示予定)

津高和一とならびコレクションの出発点にして柱となる作家が、戦前より抽象を手がける斎藤義重です。シンプルな色とかたちで抽象的な=アブストラクトの構成美を追求した《ペンチ》は、身近な道具のたたずまいが、まさしく人間くささも感じさせます。



4) 吉原治良《作品》1966年(第I章に展示予定)

斎藤義重と同じく戦前から二科会で抽象絵画を発表し、のちに「具体美術協会」のリーダーとなる芦屋市在住の吉原治良は、吉原製油の社長として、山村とは企業人同士の関係にもありました。円という普遍的な主題は、吉原晩年の到達点です。



6) 植木茂《トルソ》1965年(第II章に展示予定)

豊中の彫刻家、植木茂は、津高和一や吉原治良とともに、戦後関西の前衛美術を牽引した存在です。トルソとは四肢を欠く胴体のことで、人体彫刻の定型表現。大胆に抽象化されていますが、木の肌合いや大らかなかたちが、たしかかなぬくもりを感じさせます。



7) 元永定正《ヘランヘラン》1975年(第I章に展示予定)

『もこもこ』などの絵本で知られる元永定正は、吉原治良率いる「具体」で活躍した作家の一人です。山村コレクションには「具体」のとりわけ秀作が集まっていますが、元永については、「具体」解散後の、1970年代以降の作品も充実しています。



9) 田中敦子《作品》1958年(第II章に展示予定)

「具体」のメンバーであった田中敦子は、色鮮やかな円と線とを集積した密度の高い画面で知られています。この作品は一時期ヨーロッパへ渡っていましたが、1983(昭和58)年に山村が他の「具体」の重要作とともに購入し、日本に戻ってきました。



8) 高松次郎《影(#394)》1974-75年(第II章に展示予定)

この作品の前に立つと、思わず誰もが後ろを振り返ります。けれども誰の姿もありません。高松次郎には哲学的、観念的な作品が多く、難解とも言われがちですが、少なくともこの作品の場合、実体とは何かという問題を、誰にでもわかりやすく、かつ深く問いかけてくれます。



10) 篠原有司男《女の祭》1966年(第II章に展示予定)

「ボクシング・ペインティング」でCMにも出演した「キューちゃん」こと篠原有司男の、浮世絵版画にもとづく幅4m近い大作。蛍光色の絵の具やアクリル板を効果的に使い、賑やかな祭りの場面が繰り広げられています。



11) 白髪一雄《黄帝》1963年(第III章に展示予定)

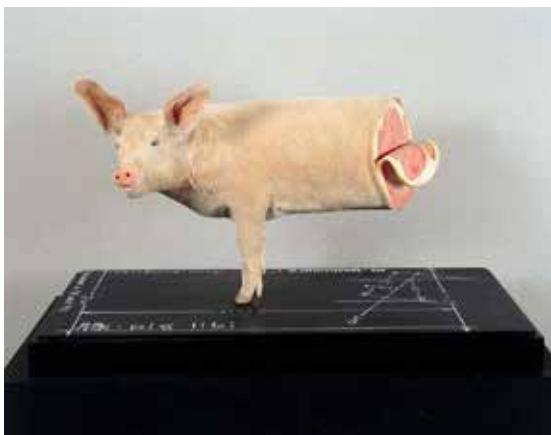
白髪もまた「具体」の一員。足で描く迫力満点の「フット・ペインティング」は、「具体」のスローガン「人の真似をするな」を地でゆくユニークな画法です。山村は早逝の間際まで「具体」コレクションの充実をはかっており、この作品も死の直前、1985(昭和60)年の購入です。



13) 関口敦仁《フラット・パルス》1981年

(第III章に展示予定)

1980年代に入ると、70年代の禁欲的な表現から一転、豊かな色彩や造形の力が見直され、関口敦仁のように当時20代の若手作家たちが新鮮な活動を繰り広げるようになります。明澄な静物画を思わせるパーツにすのこを組み合わせたレリーフ状の絵画作品は、当時の傾向をよく表しています。



12) 吉村益信《豚・pig lib;》1971年(第III章に展示予定)

フランスのポスター作家サヴィニャックによるハムの広告イメージを引用し、本物の豚のはく製で表現してしまったという作品。山村コレクションの枠を超えて当館収蔵品でも1、2を争う人気作品です。



14) 杉山知子《"THE START - a man and mamorigami"》1984年(第III章に展示予定)

大作ぞろいの山村コレクションの中でも幅約9mと最大規模で、「関西ニュー・ウェイブ」と呼ばれた80年代関西若手作家のパワーを象徴するような1点です。1983(昭和58)年に社長を辞してからの山村は、作家自身がまさか買い手がつくとも思っていなかったような若手の大作もどんどん購入していました。

お問い合わせ先

兵庫県立美術館
 〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
 TEL: 078-262-0901 (代) FAX: 078-262-0903 (代)
<https://www.artm.pref.hyogo.jp>

取材・画像提供に関すること

営業・広報担当

TEL: 078-262-0905 (担当直通) FAX: 078-262-0903

展示内容に関すること

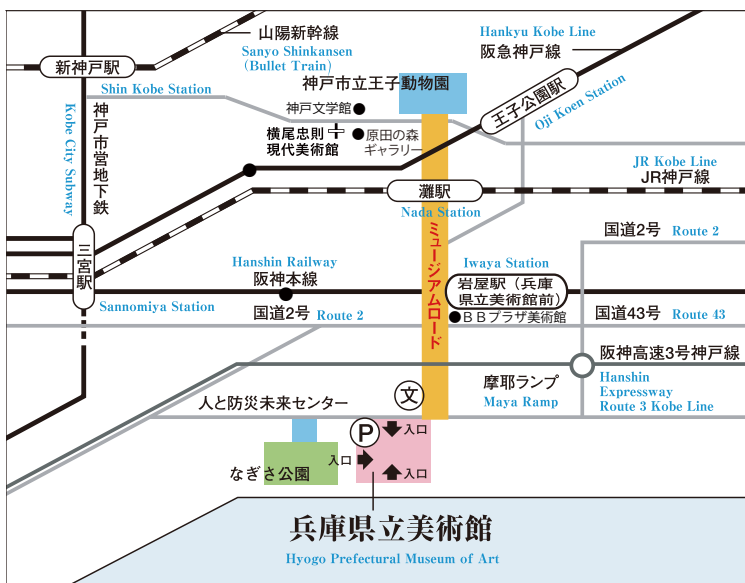
担当学芸員：江上ゆか、鈴木慈子

e-mail: egami@artm.pref.hyogo.jp (江上)

TEL: 078-262-0909 (学芸直通) FAX: 078-262-0913 (学芸直通)

【交通案内】

- ・阪神岩屋駅(兵庫県立美術館前)から南に徒歩約8分
 - ・JR神戸線灘駅南口から南に徒歩10分
 - ・阪急王子公園駅西口から南西に徒歩約20分
 - ・JR三宮駅南から神戸市バス(29、101系統)阪神バスにて約15分
HAT神戸方面行き「県立美術館前」下車すぐ
 - ・地下駐車場(乗用車80台収容・有料)
- *ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください
 *団体バスでお越しの場合は、バス待機所のご予約をお願いします。



画像使用に際しての注意

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。末尾の「申込書」をご使用ください。

○作品画像を媒体掲載される際には、「申込書」に記載の作品名・制作年・所蔵などを必ず入れてください。

○作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・改変はできません。

○画像データ使用は、本展覧会の紹介用のみとさせていただきます。それ以外での使用はできません(会期終了まで)。

○再放送、転載など二次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。

○Webサイトに掲載する場合は、必ずコピーガードを設定してください。これにより難しい場合は、解像度の低い別画像(同図版)をご用意しますので、その旨を申込書に記載願います。

○基本情報、図版使用の確認のため、ゲラ刷り・原稿の段階で「営業・広報担当」までお送り願います。

○展覧会場の取材、撮影をご希望の場合についても、「営業・広報担当」までご連絡ください。事前にご連絡のない取材・撮影はお断りいたします。

○本展に関する記事をご掲載いただきました際には、お手数ですが、掲載誌・紙または記録媒体(VTR/DVD)、URLなどを、「営業・広報担当」宛てに、1部お送りくださいますようお願いいたします。

広報画像申込書

ICOM 京都大会開催記念

集めた！日本の前衛－山村徳太郎の眼 山村コレクション展 2019年8月3日〔土〕～9月29日〔日〕

※前頁「画像使用に際しての注意」をご一読のうえ、ご希望の画像の番号に○をつけてください。

- 1 村上三郎 《作品〈空〉》1956/85年 兵庫県立美術館（山村コレクション）©TOMOHIKO MURAKAMI

- 2 村上三郎 《作品〈空〉》の再制作を見守る山村徳太郎 1984年、アールスペース（西宮）にて 撮影：小野和則

- 3 津高和一 《母子像》1951年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

- 4 吉原治良 《作品》1966年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

- 5 斎藤義重 《ベンチ》1967年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

- 6 植木茂 《トルソ》1965年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

- 7 元永定正 《ヘランヘラン》1975年 兵庫県立美術館（山村コレクション）
©モトナガ資料研究室 Motonaga Archive Research Institution Ltd.

- 8 高松次郎 《影（＃394）》1974-75年 兵庫県立美術館（山村コレクション）
©The Estate of Jiro Takamatsu, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

- * 9 田中敦子 《作品》1958年 兵庫県立美術館（山村コレクション）©Kanayama Akira and Tanaka Atsuko Association
※コピーガード対応に限り掲載可能

- 10 篠原有司男 《女の祭》1966年 兵庫県立美術館（山村コレクション）©Ushio + Noriko Shinohara, Courtesy of ANOMARY

- 11 白髪一雄 《黄帝》1963年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

- 12 吉村益信 《豚・pig lib;》1971年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

- 13 関口敦仁 《フラット・パルス》1981年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

- 14 杉山知子 《"THE START - a man and mamorigami"》1984年 兵庫県立美術館（山村コレクション）

●貴媒体についてお知らせください。

○貴社名：

○媒体名： (新聞・雑誌・ミニコミ・TV・ラジオ・ウェブサイト・その他)
※ウェブサイトへ掲載ご予約の場合、いずれかに○をつけてください。 コピーガード対応 可 ・ 不可
(「不可」の場合、「*」のついていない画像の中から、ご希望の画像をお選びください)

○ご担当者名： ○メールアドレス：

ご連絡先 ○電話番号： ○FAX 番号：

○ご住所： 〒

○URL：

○掲載・放送予定日： ○画像到着希望日：

○読者・視聴者プレゼント用招待券： 組 名様分を希望
(最大5組10名まで。本展を媒体で紹介いただける場合に限りです)